厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）

分担研究報告書

言語聴覚士等による人工内耳・補聴器装用者等に対する
言語リハビリ等の遠隔医療の体制整備のための研究（25GC1012）

研究分担者：鈴木　大介

栃木県済生会宇都宮病院・耳鼻咽喉科・言語聴覚士

研究要旨

補聴器導入後3ヵ月の経過を対面群と遠隔群で比較し，遠隔診療においても対面と同等の有効性が得られ，通院困難例に対する新たな選択肢となり得ることが示唆された。

A．研究目的

補聴器導入後3ヵ月間の経過を対面診療群と遠隔診療群で比較し，遠隔補聴器診療の有効性および安全性を検討することを目的とした。

B．研究方法

当院において補聴器導入患者を対象に，対面診療群および遠隔診療群に分け，導入後 3 ヵ月間の経過を比較した。評価項目は音場検査および語音明瞭度検査による適合率とした。

C．研究結果

対面群4例、遠隔群4例を比較した結果、適合率で有意差を認めず、語音明瞭度検査および音場閾値についても群間差は認められなかった（図１）。

D．考察

遠隔補聴器診療は、対面診療と同等の装用効果と満足度を得ることができた。但し、調整を行ううえで、調整内容を検証するための補聴器の準備や対面診療時の検査項目を増やすなどの工夫が必要である。また、調整時の PC 画面上の動きと実機における動きは異なるため、貸出器種に対する習熟（各チャンネルの担う周波数帯域とその程度など）が不可欠である。そのため、多チャンネルや複数の器種を活用する場合には調整者の負担が増加し、適合を図る難易度は上がるものと予想される。

E．結論

遠隔補聴器診療は対面診療と同等の有効性が示唆され，適切な支援体制のもとで有用な選択肢となり得る。しかし、特性測定や補聴器適合検査などが実施できなくなるため、それらをカバーするための工夫や調整に対する習熟が不可欠である。

図１

症例	年齢	補聴器装用	聴力（dB，4分法）		非装用時	装用時	適合判定
			良聴耳	不良聴耳	最高語音明瞭度（67-S単音節，%）	語音明瞭度（67-S 単音節　60dB HL，%）	
対面１	78	両耳	38.8	48.8	75	80	適合
対面２	77	両耳	36.3	43.8	90	95	適合
対面３	67	両耳	52.5	55.0	60	75	適合
対面４	70	両耳	47.5	65.0	80	90	適合
遠隔１	71	右耳	7.5	57.5	20	60	適合
遠隔２	46	両耳	36.3	50.0	60	65	適合
遠隔３	78	両耳	46.3	47.5	65	90	適合
遠隔４	83	両耳	43.8	51.3	25	65	適合